

## オリパラ学校観戦—子どもたちは「ハーメルンの笛吹き男」に連れ去られていくのだろうか？

投稿日: 2021/08/22 作成者: yonedasayoko

ここ数日のニュースで衝撃的だったのは、コロナ陽性で自宅療養を余儀なくされていた妊婦の方が、どんなに助けを求めても入院できないまま産気づいて、29週で自宅出産、赤ちゃんは病院搬送後死亡が確認されたという報道でした。誕生の時点で赤ちゃんは「まだ息があった」そうですが、通報があって救急車が来たのは45分後、そのときはすでに「心肺停止状態」であったと報道されました。

「29週の早産」は新生児には負担が大きいかもしれないが、通常妊娠だったら育たない月齢ではないと思う。ただすぐに保育器などに移して体温や呼吸を管理しないと危険が起こる可能性がある、と教わったのですが、産科医も診察に来られず、「タオルでくるんであげて」としか指示できなかったという報道もあります。可能性を云々することはできませんが、もしかすると「助かるいのち」だったかもしれないと思うと、いたたまれない気持ちです。誰も責めることはできないかもしれないけれど、この子が「助かるいのち」を奪われたとすれば、その責任は今生きている大人ぜんぶにあるのではないか。

同様に、オリンピックを強行開催し、今またパラリンピック開催に向けて突っ走る菅首相も小池都知事も、ワクチン接種もしていない子どもたちを「パラ観戦」に動員しようとしています。すでに10代以下の子どもに感染が拡大し、学校クラスターや保育園の休園が続出しているという報道もあるというのに。「いのち」は大事です。わたしのような高齢者でも、自己決定で「不必要な延命措置」は要らないというのは自由だが、医療整備されないまま「お年ですから」とトリージされるのはごめんです。しかし未来ある「子どものいのち」はもっとかけがえがない。それはコロナだけじゃなく、いじめや貧困やネグレクトなどさまざまな絶望からどうやって子どもたち自身が生きる力を取り戻せるか、それは大人の手助けなしにはできないはずだ。それなのに子どもをいのちの危険に追いやるのですか、と憤懣やるかたない思いです。かの「ハーメルンの笛吹き男」伝説ではないが、「子どもを二度と帰らないところへ連れて行かないで！」と言いたい。(米田佐代子の「森のやまんば日記」より引用)

